

## PUREGOLD

### プロローグ

街に眠る宝を掘り起こすために GOLDRUSH の旅に出た二人の主人公。

時代の荒波に翻弄されながらも若さ故の特権である純粋な野望を胸に都会の荒野を疾走する。

ピュアだからこそ、傷つきながらもサクセスストーリーを夢見る二人。

ちっぽけなトランクに詰まっているのは大きな夢

夢だけが財産だったあの頃。

土砂降りの雨にずぶ濡れになっても、その雨がダイヤモンドの雫になる。

二人の PURE GOLD な旅は続く。

ホームに Night Train

財産は トランクとギターだけ

場末の Dance hall

渡ってく 幻の Yeah Yeah

Rock Star ダイヤモンドの雨が降る

All night ギターが泣くたびに

All right チャック・ベリーもエルビスも Once dreamed

もしコイツに逢わなけりゃ Bad boy

夢を見た。

ヤノさんと旅をしていた頃の夢だった。

ヤノさんとボクはおもちゃ探しをしてオンボロ車で小さな町のおもちゃ屋巡りをして  
いた。

何度も見た夢だ。

夢を見ていながら ボクは途中からこれは夢の中だと気づく。

大抵は古い倉庫の中にいる。懐中電灯を翳しながら、奥まで進んでいく、するとま  
だ全く見たことのない、もちろん誰も見たことないおもちゃの箱が入ったダンボール  
を発見する。

このあたりから「これはきっと夢に違いない」と夢の中のボクは勘づく。

それでもこれはもしかしたら現実かもしれないとおもちゃの入った箱に手をやる、間  
違いない箱の質感まで手のひらにはリアルに残っていた。間違いないこれは夢じ  
ゃない「やったー」と興奮した時に いつも通り夢から覚める。

やっぱり夢だった、とベッドの中で一瞬は落胆するが、いつもの通り、これが夢だっ  
たと確信に変わったところで落胆な気持ちも消える。

しかし、この日の夢はいつもと違っていた。

夢から覚めると、携帯が鳴った。見慣れない番号だなと思いながらボクは電話に出る。

すると懐かしい声が聴こえてきた。

キタハラさん、おはよう！

誰？

ボクだよ

僕？

誰？

何言っているの？キタハラさん 僕だって

えッ ヤノさん？

ヤノさんなの？

ボクは声にならない声を出す

まさか、だって、ヤノさんは声が出ないんじゃ

電話の相手を思い、言葉が詰まる。

何、寝ぼけているの、キタハラさん 今日もおもちゃ探しに行こうって約束してたじ

やない？

おもちゃ探して、

今は、って言うか、ボク達がおもちゃ探しをしていたのは

40年以上も前のことだし、

寝ぼけているのか、それとも本当にボケたのか、ボクの頭は混乱している

ヤノさんは発病以来、手足の自由はもちろん、首から下の肢体の自由は全て奪われ、言葉も発することができない。

そのヤノさんが電話をできるはずがない。

「わけのわからないこと言っていないで 今山手の博物館の前に車で来ているから、早く降りてきてよ。」

電話の向こうでヤノさんは笑っている。

混乱しつつもとりあえず携帯を切った。

その携帯の画面で時間を確認するとまだ午前7時を回ったばかりである。

カーテンの隙間からは朝日がベッドの袖を照らしている。隣で寝息を立てている妻を起こさないようにベッドを抜け、寝室を出て、1階のミュージアムの窓から庭を見る。庭の芝の上にヤノさんがいた。

それまで半信半疑だったボクの気持ちはそこにいるヤノさんを発見したことでその疑いは吹き飛んだ。

ヤノさん！

ボクは博物館の大きな扉を開け放ち、ヤノさんの元へ向かった。

キタハラさんともう一度旅をしたくなってね

ヤノさんは若い頃、俳優の草刈正雄にそっくりだというのが自慢で、まさに今ボクの目の前にいるヤノさんは草刈正雄が30歳に若返ったような姿で立っている。

治ったんだよ、

ヤノさんはそう言った

治ったの？

ボクはヤノさんの言葉をそのまま繰り返した。

ほら 京大の山中教授の実証した IPS 細胞がさ、僕の体でほぼ無限に増殖する能力を獲得したんだ。その第一号患者が僕ってわけさ

ヤノさんはそのことが嬉しくもあり、自慢らしく 誇らしげも伝えた。

朝日が芝の降りた露に反射し、キラキラと光っている。

よかった！ヤノさん 本当によかった。ボクは涙で目の前が曇った。

ヤノさんは笑いながらこう言った

「さあ、キタハラさん 次行こうよ！ 次！」

「次行こう」ヤノさんがボク達の決まり文句を言っている。

ヤノさん そのセリフはおかしいって

ボクはヤノさんに近づいていきながら、話す

すると 僕が近づいた分、ヤノさんはボクから離れた。

ヤノさん ふざけないでよ、

全く

「次行こうよ！ 次！」っていうのはおもちゃが見つからなかった時にお互いを奮い立たせる時に使っていたんじゃない？

「だからさ キタハラさん 次行こうよ 次 だよ」

ヤノさんは再び同じセリフを繰り返した

何言っているの、ヤノさんは病気が回復したんでしょ

だから次じゃないって

えッ？

ボクの心の中を大きな黒い雲が覆い出している

次じゃないって！

ボクは今にも叫びそうになる

ヤノさん 治ったんでしょ。だから次じゃない

まさか 夢から覚めたはずなのに これも夢、、、

ボクは押し寄せる絶望に押し潰されまいとヤノさんに向かって歩く。

ヤノさんは 今度は はっきり口にした

次に行こう キタハラさん

僕は決して諦めないよ キタハラさん

ヤノさんに近づこうとするとヤノさんはさらに遠くに行ってしまう。

ヤノさん！

ボクは夢から覚めた。身体中寝汗をびっしょりかいている。

そしてボクは覚めながら泣いていた。とめどもなく涙が頬を濡らしている

朝起きると 一人の科学者がその人生を閉じたことをニュースは伝えていた。

昨夜、星になった偉人は身体の筋肉が徐々に動かなくなる筋委縮性側索硬化症 (ALS)と闘い続けてきた「車いすの天才科学者」のスティヴン・ホーキング博士 だった。

キタハラがその知らせ伝えたニュースを同じ日ヤノも読んでいた。

独創的な宇宙論を発表し続けてきた博士は、科学の未来、そして人類の未来について多くのメッセージも遺していた。と同じニュースは伝えていた

ホーキング博士の功績はあまりに大きく 一言では言えないが、それでも博士は人類史上最高の謎を解き明かすことを誰でにもわかるように言葉を使いながら説明し続けたことが何より尊いことだとヤノは思っていた。

博士の発病は21歳の時だということだった。

世界最高の知性のひとりでもあったホーキング博士。身体機能が徐々に失われていったとき、彼はいかにアイデアを整理し、独創的な理論をかたちにしていったのかを死を伝える哀悼のメッセージには綴られていた。

こんな内容だった

「星を見上げること、足元は見るな」

「事を決してあきらめないこと。仕事は意味と目的を与えてくれる。仕事がないければ人生は空虚。」

「そして幸運にも愛を見つけることができたなら、その存在を忘れず、投げ出すな」

幸運にもヤノは3つとも実行しているし、愛の存在をしっかりと受けることができていた。

そんなホーキンス博士と同じ境遇になるとはもちろん夢にも思わなかった。

ヤノの発病は60を過ぎてから、体の異変から、病名の決定までが人生の最悪の時期だった。

悪夢としか言いようのない状況で何かに救いを求めたが、現代医学ではどうすることもできず、当時は家族の差し伸べてくれた無二の愛にもボクは怒りをぶつけて、妻や子供を罵倒した。

神はいない！と天に叫び、自暴自棄になった

仕事は続けていたが、それでも以前ほどのエネルギーを持って仕事での困難を突破することはできなかった。

そんな絶望の淵にいたヤノに親友がプレゼントをしてくれた。

二人の宝探しという青春時代を題材にしたミュージカルにしてくれて、ボクを劇場に招待してくれた。



苦しくて 絶望して、ヤノは泣き明かしていたので涙は枯れてしまったと思っていたが、それは間違いだった。

ヤノはそのステージを見て、人目もはばからず号泣した。

泣いても泣いても涙は溢れ出る。苦しくても涙はこぼれる、感動しても涙はこぼれる、しかし苦しい時の涙はいつか枯れるが、感動の涙は決して枯れないことをこの日初めて知った。

そしてヤノは蘇った。

親友は生きる望みを与えてくれた。

その物語の中で困難に当たると「次に行こう」が二人の合言葉だった。

おもちゃの宝の山をライバルに奪われたり、落ち込んだ時、失恋で立ち直れない時、親友は「ヤノマン 次だよ、次行こう」と言って前を向かせてくれた。

それを今この状況でヤノに思い出させてくれたのだった。

ヤノは不治の病という絶望の淵から蘇り、再び 失われたと思っていた社会とのつながりを再び得ることができ、ヤノは回る地球の中で自分が生きているアイデンティティを得ることができた。

何より一番喜んでくれたのは家族だった。

気丈に振舞っていた妻はヤノの前を向く姿に病気になって以来初めて涙を流した。その涙は本当に尊く、ボクは妻に顔を近づけてもらい、動かない唇でキスをした。

さあ そろそろ物語を始めよう

前編では宝探しの話をした。

この新しい章ではボクが物語の語り部になるとしよう

ボク、矢野雅幸と親友 北原照久の物語の続編を話始めよう

時代は70年代から80年代に突入していた。

そう ボクらは夢を信じていた

その時代はサクセスストーリーを夢見ることしか、人生を生きることが証明できなかった時代だった。

でも本当に欲しかったのはサクセスではなく、サクセスストーリーと一緒に語れる無二の親友の存在だった。

描いたサクセスを追続けたとしてもたどり着けるのはひとにぎりの人だけだと頭では理解できたけど、それでも親友と夢を語り合ったあの日  
夢はいつしか幻に消える、しかしそれでも大切な人はいた。

80年代 僕らは確かに夢を追っていた。。

中学生になった時に香川県の観音寺市に転勤してからは、田舎の自然の素晴らしさを満喫して、新聞で連載していた山川惣治の「少年ケニア」がボクにとってのヒーローで山へ入ってはイノシシを狩り、川では仕掛けを作って魚を獲ったりしたというのは全くの嘘で都会から田舎に引越してきた生活は退屈そのものだった。プラモデル作りという男子生徒の通過儀式のような趣味に興味を失っていったのは、10代の男子の女子にもてたいという純粋な芽生えがあったからで高校2年生の時に無理やりクラスメイトを集めてバンドを作った。

中学生の頃はポピュラー・ミュージックを聴くのはラジオだけで、ボクは毎週ラジオで「9500万人のポピュラーリクエスト」を聴くのを楽しみにしていて、いつもヒット・チャートの1位～10位をノートに書き写すのが海外の音楽との唯一の接点だった。当時はエルビス・プレスリー旋風が去り、日本ではビートルズとベンチャーズが台頭して来た頃だった。

もちろん高校生のボクにギターを買うお金などあるはずもなく、プラモデルの要領で見よう見まねで自作した3本のエレキギターを、同級生のけんチンが作った手作りの8Wアンプにプラグを差し込んで一つのスピーカーで3本のギターの音を鳴らすという荒技をやったのけた。

ギターが揃うとあとはドラムが必要になり、よこチンを無理やりメンバーに引き込み、ドラムを買えと脅したが、高校生のお小遣いでは買えるはずもなく、フライパンとバケツにダンボールで即席ドラムを自作して、練習に明け暮れた。

いや正確には明け暮れる間も無く、近所に住む民生委員のおばちゃんが警察に「過激派のアジトから爆弾をつくる音が聞こえる」と通報され、1日目にして、活動停止を余儀無くされた。

しかし、ガサ入れをされても真空管を使った火炎瓶は見つかるはずもなく、ここで練習をせずにまちの外れにある豚小屋の跡地でやれと警察官に説教もされず解放された。

新築された小屋に移った豚が残した堆肥の匂いがまだ残る豚小屋の糞の匂いに悩ませながらも、ボクたちは今度こそ日々バンドの練習に明け暮れた。さすがにフライパンとバケツでは人前で演奏するわけにもいかず、ブラスバンド部から太鼓とシンバルを借り、即席のドラムを用意して、ボクらのバンドは学園祭のステージに立つことが決まった

ついに明日がステージだという放課後、ボクは「オリジナルの曲を君に捧げる」という手紙にその曲の詞を添えて、マドンナのサチコを校門に呼び出し、告白したというのは嘘で、誰もいなくなった教室を見計らって彼女が座る机の引き出しにそっと忍ばせた。

急遽バンド名を決めなくてはならなくなり、リーダーであるボクの一存でバンド名は“フォーピッグス”

“4匹の子豚たち”に決めた。

豚小屋からネーミングしたバンド名が「フォーピッグス」に決まり、猛特訓をしてボクらは学園祭のフィナーレのステージに立った。

ケンチンの親父は街で唯一の土木建築屋を営んでおり、息子を無理矢理生徒会長に推挙した挙句、できたばかりの即席バンドを学園祭の“トリ”に出演させたのも、親父のゴリ押しであり、そのゴリ押しを可能にしたのは学校への多額の寄付金の力に他ならなかった。

おい けんチン

“チン” 言うな ケニーって言えや “ケンチン”こと オオクラケンイチ サイドギター担当はむくれて反論した。

まあ いい 円陣を組もう こちらもギター担当のヨコオマコトこと“ヨコチン”が言った。

なぜか 僕の周りはみんな “チン” ばかりだ。もう一人のドラムはタマダキンジロウ、周りからは“タマキン”と呼ばれている。ボクは雅幸 “マッケンジー”と呼ばせているが、周りはボクを“ヤノマン”と呼ぶ。

“ヨコチン” “ケンチン” “タマキン” “ヤノマン”

チン、チン、キン、マン、

女子にはとても受けが悪い。そりゃそうだろう。

ヤノは隣のケンチンとヨコチンとスクラムを組んだ。

ヤノマン カッコよく決めてくれや

タマキンはステージを前に顔面蒼白になって震えている。それでも精一杯、強がってボクを鼓舞してくれようとしているらしかった。

「おう！」

ボクはタマキンに応えた。

そしてこの時のために覚えてきたセリフを口にした。

アメリカではベトナム戦争への反戦ムードが高まっていて、ある革命家がインタビューに答えた内容を拝借し、アレンジを加えたものだ。

「ボクらの世代は戦争を知らない最初の世代だ。

何が大事かというと、自分に進むべき道が自分で選べるってことだ。」

ここでヤノは一息つき、周りを見渡した。

周りはあまりのボクのかっこよさに目を白黒させている

所詮 こいつらにこんな金言が響くはずもない。

それでも組んだスクラムに力が入った。

「いいか、最高のステージをしよう、大切なのはこれからどう生きるかだ、向かうべき夢があるのかどうか。そこに尽きる。

俺たちは未来永劫、大人になってもこのステージを思い出すはずだ。」

ボクはあえて「俺たち」と表現した。

決まり過ぎるぐらいに決まった。国語が最低の成績のよこチンにもこの熱い言葉は伝わったらしい、顔を紅潮させている。

よし！行くぜ！

ヤノは「いくぞ」じゃなくて「いくぜ！」と言った

それがロックンロールだ！

体育館のステージでは前のダンス部の演目が終了したようだ。アナウスが聞こえた。

では観音寺祭 最後のステージです トリは3年生 ヤノくん ヨコオくん オオクラくん タマダくんの4人組で いや間違えました。

司会者はここで一呼吸おいた。

そして

ヨコチン ケンチン タマキン そしてヤノマン。

そこで “いいぞ！ 変態バンド！”と突っ込みが入る。

周りが ゲラゲラと笑う

まあ 笑いを取るもの必要だ。

ヤノは体育館のステージから観客席を見渡した。

司会は笑いが止んだことを見計らい

大声をあげた。

“フォーピッグス” のステージをどうぞ お楽しみください！！

最前列を陣取ったクラスメイトは全員で “ブヒブヒ”と合唱しれくれた。

演奏するたびに全女子生徒の悲鳴に聞こえたのはアンプにギターを擦り付けてフィード・バックやハウリングを起こしたメチャクチャな雑音で、気がついた時には最初にステージ前にいた人達が、会場の後ろの方で固まっていて、先生が見かねて

アンプのプラグを抜いてボクらのバンドのデビューコンサートはそのままラストライブになった。

それでも、ボクには望みがあった。もちろんそれはマドンナのサチコに宛てたラブレターの返事だった。

その返事確かめるべく、今度はしっかり裏門に小走りして向かった。2時間待ったがマドンナは現れず、みんながキャンプファイヤーの火を囲んでフォークダンスに盛り上がっている中誰もいなくなったクラスに戻った。

暗闇迫る教室には一人マドンナが立っていた。

神様はいたんだ。

ヤノは生まれて初めて神に手を合わした。

マドンナは神々しく後光が差していた。

そしてマドンナは濡れたような唇を開いた。

ヤノの心臓は ドクン！と音を立てた。

「ヤノくん 手紙ありがとう。返事を書こうと思ったけど、それより 今この場で返事を受け取って」

そう言ってマドンナはセーラー服を脱いで 下着姿になり、

「私の全てをヤノくんにあげる」

そう言って机に横たわった。

というのは全て嘘で、マドンナの机を覗くと手紙は消えており、読んではくれたんだと期待を膨らませたが、もしやと自分の机を覗くと真っ二つに破かれた手紙が入っていた。



まあ “こんなものさ”と気を取り直し、校庭に目をやるとキャプファイヤーの炎が燃え盛り、その周りで男女が手をつないで踊っている。すでに校庭は暗闇になり、真っ赤な炎が校庭を照らしていた。

ヤノは失恋の痛手を忘れようと、その光景をぼんやりと眺めて、

“これが 青春だ“

と涙をぬぐった。

いつか 年をとって、結婚し、子供ができ、孫ができ、ヨボヨボのジジイになって、思い出すのはこのシーンだと思う、ヤノは天高く燃え上がる炎をしっかりと睨に焼きつかせようと思った。

ヤノマン 何ばしとるか？こんなところで みんなもう踊っているけん、

早く 来いや 感傷に浸っている俺をケンチンとヨコチンが呼びに来た。

ヤノマン 呼ばれるのは好かん言っとる、俺のことは マッケンジーと言ってくれ」ヤ

ノは口をとんがらせて反論する。

ケンチンは嬉しそうに、そんなことどうでもいいし、 マドンナのサチコも踊っているな、さっき手をつないだぞ、俺 しばらく 手洗わない！

と言って、ケンチンはサチコが触れたであろう自分の手のひらをクンクンと匂いを嗅いでいる。

バカだと思いつつも ヤノはどこか羨ましい自分がいる。

ボクも匂いを嗅ぎたいと言おうとした瞬間、その手をヨコチンが引っ張り、手を舐めた

バカ！ や、やめろや！

さすがのケンチンも怒ったかと思ったが、彼は自分の手を舐められたこと怒るのでなく、サチコの触れた手の匂いが消えたことを真剣に怒っている。

ヤノはその情けない二人の姿を目の当たりにして、匂いを嗅がせてくれと言わなくてよかったと心底ホッとした。

早く ヤノマンも来いや！

まあ それでもいいやつだ、自分がサチコと手をつないだことを、ボクに自慢しつつも、わざわざオレを探しに来てくれたらしい

ヤノは破れたラブレターをポケットに押し込み、校庭への階段を降りた。

みんながヤノを迎え入れ、“アンコール！”と言ってくれた。

ヤノマン アンコール！

弾いてよ！ヤノマン！

燃え盛るキャンプファイヤーの炎は最高のスポットライトだ。

ビートルズもワシントン DC でのライブは全く自分が演奏する音が聞こえなかったとミュージックライフに書いてあった。まさにこんな感じだったのかと勝手な想像を試みる。

これがボクたちのライブだ、

バンドメンバーも4人全員が揃っている

その時 サチコと目が合った。少し申し訳なさそうな視線を送ってくれている。

彼女の表情も炎で照らされて、情熱を帯びているほど、美しい。

女は魔物だ、ついさっき ボクが書いたラブレターを破いたくせに そんなことをおく  
びにも出さず 微笑みを携えてボクと視線を合わせている。

ボクはもう一度心の中で「君に捧げると」と誓い、ギターストラップを首から回し  
た。

アンコールも何も ステージでは1曲も演奏できなかったから、決してアンコールと  
いうのは正しくない、まあそこを議論しても始まらないので

アンコールというか リクエストに応え、“フニクリ・フニクラ”をアコステックギターで  
弾いた。3人もアコステックギターで続いた。ドラムはシンバルでリズムを刻んだ。

ウワーツ！

体育館のステージでは決して聞こえなかった歓声が校庭にこだました。

そのこだまは観音寺山にリフレインし、さらに大きく響いた

ヤノは披露しようとしていたロックではなかったけど“フニクリ・フニクラ”をメンバー  
全員とアコステックギターで弾き、ロッケンロール！とい代わりにフニクリ・フニク  
ラ”！とシャウトし続けた。

ヤノは夢から覚めた。

最近はいつもこのシーンで夢が終わる

夢の中でのライブではめちゃくちゃだが、ギターを弾いていた自分がいた。

今こうして手だけでなく、足も動かなくなってしまうと夢の中だけが幸せに感じてし  
まう。

夢の中でヤノはいつまでもギターを弾き続けていた。

夢なら覚めないでくださいと念じるとそこで夢から目が覚める。

頭だけがクリアなままであることが果たして良いのか、わからない。

いっそのこと頭の神経もどうにかなって欲しいと念じるが、神様はきっと慈悲深くそれを拒絶する。

難病と診断され、絶望と戦いながらも、希望を持つんだと自分を鼓舞してきた。今は決して弾くことのなくなって、飾り物になったギターに目をやる

最近では自分の体で唯一クリアな反応をしてくれる脳も年相応な退化が始まり、昨日何をしていたか、かが曖昧なことがある。

その分過去のことはより鮮明になっている。

無二の親友キタハラさんと旅に出た日のことはまるで昨日のこのように覚えている。

夜行列車で上京し、好きなデザインの仕事でサクセスを目指す。

親友との出会い、そして宝探しの旅を続けた。

そして独立 スーパースター矢沢永吉さんのデザインの仕事を取ることが幸運にもでき、夢を叶え、大金も掴んだ。そして次の夢が目の前に現れた。

仕事をグラフィックデザインから飛行機のデスクトップモデルの販売に切り替えた

40 過ぎの冒険も応援してくれる家族とスタッフに恵まれ、事業も軌道に乗った、さ

あ これからだと思った瞬間 病魔がヤノに襲いかかった。

渋谷の百貨店でのイベントは大成功だった。主催者である百貨店の広告担当からも労いの言葉が届いた。

今年のイベントではぶっちぎりの入場記録だったらしい。

しかし 成功が大きければ、そのあとに続く、日常との落差が堪えた。

何をしてもどうもしっくりとこない。妙な焦燥感がこみ上げるばかりだった

梶原一騎の「巨人の星」のワンシーンで星飛馬の宿敵 花形満が大リーグボール打倒を目指している中、新聞記者に囲まれて、自分の少年期を回想するシーンがある。

花形は記者たちに語る、「子どもの頃、祭りの後の過ごし方がわからない」というシーンがある。

記者たちは唐突の花形の回想に戸惑いつつも耳を傾ける。

祭りが終わり、家への道、それまでの華やかな空気が一転し、その帰り道の暗さが寂しさを募らせる。そんなシーンをキタハラは何故か思い出していた。

キタハラにとって まさに祭りに匹敵するような展示会の日々はその祭りの終わりがその後の日々を耐え難いものにしていった。

そんな焦燥の中でも、かすかな希望は 自分でもこんな展示をできないか？ということだった。

そんなアイデアを誰となく話した。

それは自分のアイデアが素晴らしいものであるというよりは、荒唐無稽に思えたアイデアを周りの人はいかに受け入れてくれるのだろうかという確認に近かった。

特に この展覧会に実際に足を運んでくれた人には少しだけ前のめりで持ちかけた。

皆、キタハラに会うと、展覧会を絶賛してくれた。

「テルちゃん 行ったよ！」

「良かったよ、」

「おもちゃ すごいね あんなに持っていたんだ」そんな賛辞の言葉が続いた。

しかし、キタハラが展示を自分でやったら、どうかな？と尋ねると怪訝な表情に変わった。

「自分で、ってどういうこと」

キタハラは答える

「自分でミュージアムを運営できたらな？って」

「テルちゃん そりゃ無理だよ、ミュージアムっていうのはさ、国とか、大きな企業が作るもんだろ、」そう言って、笑って、話題を変えた。

確かに ミュージアムを自分で作ろうというのはキタハラ自身も無理に思えた。

資金は当然の事、建物だって、マンションを借りるのとわけが違う。仮にミュージアムをつくる金を銀行から借りるとしよう。一体いくら必要なのか、見当もつかない。

都心のある程度地の利がいい場所にした場合、買うのはハナから無理としても借りたっていくらぐらいかかるのだろう。

不動産価格の異常とも言える高騰さは、いつの間にか日本の銀行は、企業にお金を貸すときに「お仕事の内容やどれだけ儲かっているか？」ではなく、「企業がいくらの不動産を持っているのか？」だけを見るのが普通になっている。

どう考えたって、おかしい、企業の価値がその商品やブランドでなく、所有する土地の値段で決まっているなんて。

その異常さは、にわか金持ちを生み、土地ころがしなんて言葉が生まれる始末だ。

キタハラはいつしか 展覧会前に一人、実家が経営するスポーツ店の地下室でおもちゃを梱包していたことを思い出していた。

数ヶ月前、ここでおもちゃ展を開催することに気持ちを高ぶらせていた。

仕事が終わるとそのまま地下室で一人、おもちゃに小さいシールを貼っていた。そのシールには番号が書かれていて、展覧会用にナンバリングされている。気の遠くなるような作業だったが、一度も苦しいと感じなかった。

展示期間が近づくと展覧会の企画会社が送り込んだアルバイトと二人、黙々と同じ作業を繰り返した。

いつしか地下室には重い空気が立ち込めていく。アルバイトも「タバコに」と言いながら外の空気を吸いに行く回数が増えている。来る日も来る日もおもちゃを薄紙に包む作業は彼にとっては修行僧になったようなものだったろう。

百貨店から「展覧会をしませんか？」と依頼を受けた際は、ただただ嬉しかったが、会期が迫ってくると本当に自分のおもちゃが人目に触れることに耐えうるのかが心配になってきた。

それとなく その百貨店がそれまでに展示を行った実績を調べてみたりした。誰もが知る画家から始まって彫刻家、学校の美術の教科書に載っている名前と自分のコレクションが同列に並んでいいはずがない。そんな気持ちがヒシヒシと押し寄せてくる。

そんな気を知らずにアルバイトが能天気の話しかけてくる。

「見にくる人いますかね？」

それは言うてはならない言葉だ、そう言ってキタハラは香港マフィアから横流ししてもらった拳銃でアルバイトの心臓を打ち抜いたというのは嘘で「馬鹿野郎、それがわかんないから不安なんだよ」と言う言葉を飲み込み、

「来るといいなあ」と差し障りのない返答をするが、内心は「本当だよ、来る人いるんだろうなあ」ともし、今、この瞬間、百貨店から連絡があったら、「やっぱり止めましょう」と言いたいぐらいだった。

それでも単純におもちゃの梱包作業は楽しく、そのおもちゃを手にした時の物語がフラッシュバックする。

このおもちゃはあの街で手に入れたんだ、ヤノさんと二人宝探しの旅をしていた三島のおもちゃ屋だったなあ、と

つい手を止めて感慨にふけているとアルバイトが無慈悲に「北原さん、手が止まっていますよ、もうすぐ最終電車の時間だから、僕もう上がります」と能天気の話しかけている。

まあ この狭い倉庫での作業には彼のような能天気さは救いだった。

1983年 ヤノはレコードジャケット専門のデザイン会社を設立し、紛れなく一国一城の城主になった



ヤノは正直 好きなデザインができれば幸せなほうだ。

しかし会社はそうも言ってられない。

利益を上げて税金を払い社員に給料を支払って行かなくてはならない

月末が近づくと、スタッフがヤノのそばに近寄ってきて、毎回同じことを伝える。

社長今月また赤字ですよ

このままだと私に給料払ったら、家賃払えません。

家賃とスタッフの給料

どっちを先に払うか？スタッフの言い方は微妙だ。

ヤノは仕事に集中したように デスクに向かい スタッフの言葉を聞こえないふりをした

アイドルブームが到来してレコード業界は潤っている。

今までなら脚光を浴びなかつたらろう作曲家や作詞家もヒーローになれる時代だ

羨ましくないと言えば嘘になる

なんで俺にはビッグな仕事来ないんだ

ヤノにはつい愚痴がでる

社長事務所の家賃が高いんですよ

原宿なんかに構えるから

デザイナーは原宿に決まってるんだ！ ヤノは口に出さずに心で反論した。

ヤノは再びアンティーク屋にコレクションを売る算段を始めた。

ついにおもちゃの棚に手をつけなくちゃならないな

ヤノはこれまで売らずに耐えてきたコレクションの棚を羨ましそうに眺めた。

ヤノはスタッフを先に返して今日も一人事務所でデスクに向かっていた。

ヤバイな

スタッフを無視しても何も解決しない、いくら2人の会社とはいえ、僕も経営者だ、甘いことを考えてもしょうがない。

実際のところ、今月も家賃払ってなんだかんだで、スタッフに払う給料もギリギリだ。

ヤノはコレクションを売ることを決断し、知り合いのアンティークショップに電話を入れた。

相手はすぐに電話に出た。

今日これからだけど、店に行ってもいい？

近所のアンティークショップは結構繁盛している。

仕入れても仕入れても 買手が後と経たないらしい。

実際ヤノの声を聞くと電話の先の主人は いいよ、待ってるから 何時でも と言って上機嫌だった。

ヤノは受話器を置いて、店に売りに行く おもちゃを薄紙に包む。

これは キタハラさんと一緒に旅をして三島で発見したおもちゃだ。

これを売ったらキタハラさん怒るかな、その時の様子がまざまざと浮かぶ

どっちが先におもちゃを発見しても、公平に順番でおもちゃを分け合ったんだった。

分け合う方法はまちまち、“じゃんけん”だったり、“インベーダーゲーム”だったり

と、そんなことを思い出したら ヤノは包むのを一瞬躊躇った。

しかし、背に腹は変えられない。

気をとりなおし、丁寧におもちゃを包んだ。

包んだ数点のコレクションをしっかりと厚箱のケースに入れ、ヤノは事務所の電気を切った。

扉を出る際、もう一度 抜けたコレクションのあった場所を眺めた。

そのおもちゃがなくなったところだけ、なぜか光が当たっているように感じる

キタハラさんが初めてボクのアパートを訪ねてくれて、暗い部屋の電気をつけておもちゃを魅せた時のことをなぜか思い出す。

あの時のキタハラさんには驚いたなあ

あんなにボクのしたことに感動してくれたのは後にも先にもキタハラさんだけだった。あの日を境に、二人はおもちゃ探しの旅に出た。

それにしても キタハラさんは熱しやすく冷めにくいから ヤノはなんだかそんなキタハラのことを思い出す。

あれからずっとキタハラさんはおもちゃの虜になり、今では自分のコレクションで展覧会を開けるまでになってしまった。

出会ってすごいな

ヤノは一人おもちゃの入った紙袋を抱え、知り合いのアンティークショップへの道を急いだ。

表参道のヤノの事務所から歩いて 10 数分の場所にその店があった。狭い間口の店に入ると店主はヤノの来店に笑顔を見せた。

広いとは決して言えない店内にはレトロイがガラスケースいっぱいに並んでいる。

アンテークという表現と一線を引くために店のオーナーはあえて「レトロトイ」という言い方を好んでいる。

「ヤノさんが来るなんて珍しいね。近所のわりにはさ、おもちゃ売る気になった？」  
挨拶代わりに店主の言葉にヤノはドキッとす。

店主ともう一人見慣れる男がカウンター越しにいた。

彼、造型師なんだ、こちらはヤノさん  
新進気鋭のデザイナーだよ、ね、ヤノさん

造型師？

「いやいや 確かにデザイナーであるのは間違いないけど、気鋭じゃないかな」  
ヤノは苦笑いで答える。

店主に造型師について聞きたいと思い、紹介された男に向かい合った。

「初めまして ヤノともうします」

男はヤノを一瞥して、「ウス」と目を合わずに答えた。

正面で向かい合うと できれば関わりたくないようなタイプだった。

肩まで伸びっぱなしになった髪はきっと生まれてから一度も櫛でとかしたことがないか、床屋でパーマをかけて失敗したかどちらかだ。

さらにアルチューなのだろうか？手が小刻みに震えているように見える

ヤノの視線が彼の手元に向かったことで店主が反応した。

ああ ヤノさん、彼はアルチューじゃないよ、ほら造型師って粘土みたいなもので形を作っていくんだ、だから無意識に指先で粘土をこねちゃっているんだよ、

と店主に言われ、造型師の手元を見たが その粘土はなかった。

無意識に粘土をこねる感覚もすごいが、それ以上にヤノを驚かしたのは「そもそも何を造型しているんだ」と言うことだ。

造型師は挨拶の「ウス」以外一切の言葉を発しない。

そのかわりに店主が話した。

今はさ、レトロトイも在庫が豊富なんだけど、やっぱり 年々売りに来るおもちゃは減っているんだよ

ヤノはかつてキタハラさんと宝探しと称しておもちゃ屋を巡っていたことを思い出した。

ヤノさんたちは第2世代だよ。そして純粋におもちゃが好きでハンティングしていたけど、まあ 大抵は商売目当てというか、古いおもちゃが「金」にしか見えない人が大勢いたんだ。彼らが古いおもちゃの価格を一気に高騰させてさ、まあ そんな輩からおもちゃ買っていたから僕もおなじ穴のムジナだけど

そう言って店主は笑った。

彼の話のを要約すると造型師にこれからおもちゃの原型を作らせるとのことだった。それは古いおもちゃは結局今生産しているものでないため、供給は近い将来間違はなく、なくなっていくので、今から次の商品になるものを企画しているとのことだった。

先のことか？

ヤノは好きなデザインの仕事をしている。

しかしあまり将来のことを考えていないというか？目の前の仕事をこなすことに追われているだけだ。将来と云うより月末の支払いのことを考えるだけの毎日だ。年もあまりかわらない この店の主人は店を流行らせているだけでなく、次の時代のことを考えて、手を打っていることに焦りを通り越して、嫉妬すら感じてしまう。そういえば ヤノさん なんか 用事があったんだよね、わざわざ来てくれるなんて、その紙袋、もしかしてヤノさんのコレクション？

売る気になった？

造型師は店主の“コレクション”と云う言葉にビクッと頬の筋肉が反応した。

何か？売ることか？

造型師は言葉を発した。

ヤノは言葉を発した造型師をもう一度マジマジと見る。

無表情だった彼の口元に笑みが浮かんだ。

ヤノは迷いを振り払ったかのように店主に言葉を返した。

「いやいや コレクションなんかじゃないよ、家にあった食器を実家に持っていくところ、なんかさ、久しぶりにおもちゃをここで買っていたことを思い出しちゃってね、ごめんね ひやかしに来たみたいで」

ヤノは咄嗟に場を繕った。

「コレクションなんかじゃないよ」というヤノの言葉に造型師の表情は能面に戻り、再び 指先はせわしなくそこには存在しない粘土をこね始めたかのように動き始めた。

ヤノはしばらくの時間、旧知の店で過ごした後、別れを告げ通りに出た。

やっぱり 売れないよな、キタハラさんとの宝探しをした思い出が詰まっているものな。ヤノはギリギリのところでおもちゃを売るのを思い留まった。

その時、ヤノの脳天に閃きが突き刺さった。

そうだ！ どうせなら キタハラさんに買ってもらおう

これは名案だ、そうすれば 今月の家賃もスタッフの給料も、どうにかなるぞ！

キタハラさんに買ってもらおう

キタハラさんに買ってもらおう

キタハラさんに買ってもらおう

とヤノは事務所まで帰る途中、呪文もように唱えてウキウキしながら夜道を急いだ。

PURE GOLD80s

1983年8月、大型の台風が上陸して日本を横断している最中に、原宿のCAT ST. ENDに龍神が潜むと伝えられる「ピンクドラゴン(龍之紅粉)がオープンした。

エキゾチックなネオン管が輝きを放つ、ロックンロールが店内に鳴り響く、入り口にそびえ立つ柱の上には黄金の球体が怪しく光る、それはまるで祭殿を彷彿させていた。

本場アメリカにもない、最もアメリカンドリームがここ原宿に誕生していた。その建物の上の空はすっかり日が落ち、暗闇を作る、その暗闇がさらに祭殿を際立たせていた。

そこから歩いて数分の場所にヤノは念願の個人事務所を設立していた。

ピンクドラゴンが開店から数日経っても全く長い行列は変わらない盛況ぶりだった。

ヤノもそこが原宿で伝説を作った山崎眞行さんの店だということは知っていた、それはヤノが憧れる矢沢永吉さんも山崎が作った店に通っていたからだ。

山崎眞行のサクセスストーリーは当時の原宿ではすでに伝説になっていた。

怪人二十面相という店にドクロ旗をかかげ、彼が生み出す物語に若者が狂喜乱舞し、店に訪れ、山崎は巨万の富を手にしていた。その後 英国からきたスーパーモデルと出会い、世界を旅した。その旅を物語にした店をシンガポールナイトという名前にしてオープンし、山崎は店に物語をつけた、そんな店は東京中 探しても一軒もなかった。山崎はどんなに富を手に入れても、彼女と出会ったことが人生にとっての大事業だったとそののちに書いている。

その山崎がプール付きのビルを東京の中心地につくったのがこのピンクドラゴンであり、彼の成功は単なる巨万の富に終わらず、カルチャーになり、原宿の名もなき道に名前を与えていた。

ヤノはその原宿に初めての事務所を構えた。原宿には何かわからないが人を惹きつける磁力があったからだ。その磁力をヤノは感じていたし、その磁力がヤノにチャンスをもたらしてくれるような気がした。

今日はヤノが開いた事務所に昔の仲間が訪ねてくれていた。

まだ食えない状況に変わりはないが、それでも一国一城の主人になったヤノの仲間が持ち寄りでささやかなパーティを開いてくれていた。

ヤノは飲めない酒に気持ちだけが酔っていた。

事務所にはヤノの作品の他に趣味であるギターが飾ってある。

ギターは東京に出てきて、就職したレコード会社の初任給で買った。

現金で買えずに、10回払いで分割した、まだマルイのできる前の話だ。

毎月、給料が出ると買った楽器屋に分割した金額を収めに行く、やっと全部払い終えた時、これでやっと自分のギターだと思えた。その夜は夜通し、弾き続け、翌日寝坊して会社に遅刻して先輩に大目玉を喰らったのを今でもよく思い出す。

ヤノはそのギターを眺めるたびに故郷での文化祭のあの日を思い出すし、ギターの弦を弾くと、矢沢永吉がギターを片手に故郷を後にしたサクセスストーリーに想いを馳せることができた。

ギターはヤノにとってタイムマシンのような存在だった。

「ヤノさん」



肩を叩かれ後ろを振り返るとそこには親友のキタハラが立っていた。

「あっ、キタハラさん 来てくれたんだ！」

「そりゃ来るよ、ヤノさんの事務所開きだもの」

「いやいや 事務所開きなんて、華々しいもんじゃないよ、昔の仲間が仕事のない僕をなんとか応援しようとしてくれたんだ、感謝するけど、まだまだ食えないなんて正直情けないよ」

「何言ってるの、ヤノさん これからだって、これから 僕たちまだ若造だろ、ここからスタートだよ」

そう言いながらも、スタートを切ったヤノとまだスタートらしいものを全く感じられない自分との差が開いた感じがしてした。

「いい名前だね、ビタミンスタジオって」

「ありがとう ビタミンスタジオって、いつか自分が独立したら屋号にしようと思っていたんだ」

ヤノはそう言って、ロゴの入った着ているTEEシャツを誇らしげに胸を張ってキタハラに見せた。

「すごいな ヤノさん オリジナルのTシャツじゃない？」キタハラは眩しい眼差しでヤノが着る Tシャツを眺めた。

すでにキタハラが通った青山学院の裏門に開店したポートハウスにはここ数年、長い行列ができるようになっていたし、いちばんすごいときには 3,000 人ぐらい並んでいて社会現象にもなっていた。

それを横目で見ると、自分でも何かできそうだったと思うが、想像はしても、行動を起こすには至っていない。そんな焦燥感に似た気持ちを横目に、ヤノさんは着実に夢の実現に向かっていくように映る。

キタハラさん ピンクドラゴン 行った？

キタハラはその質問に一瞬戸惑う、

ピンクドラゴン？

来る途中 人だかりができていたあの奇抜な建物だろうか？

キタハラはそのヤノの質問に答える。

なんか、小さなホテルかと思ったけど、それがその ピンクなんとか、かな？

「そうそう それだよ、原宿の観光名所ができたって感じで毎日行列を作った若者たちが日本中からピンクドラゴンに買い物に来ているんだ。ほらクリームソーダを作った山崎さんの新しい店だよ」

もちろんキタハラも山崎さんのことは知っていた。70年代末には1日1億円という驚異的売り上げを記録していたことで時代の寵児になったが、その姿をマスコミの前にはあまり見せることはなく、その表に出ない、露出しないことが彼を生きる伝説にさせていた。その山崎さんが作った新しい店がピンクドラゴンか！

原宿はかつてキタハラが青学に通った頃とは全く変貌を遂げていた。日本中のクリエイターが流れしてきた。それはまるでサンフランシスコのゴールドラッシュに押し寄せた時代を彷彿させていた。吉田拓郎が「ペニーレーンでバーボンを」と歌ったフォークソングの時代はすでに終焉していたが、そのフォークソングを歌った若者は今、ロカベリーに身を躍らせ、ロックンロールをシャウトしていた。そんな現象を大人たちは不良と決めつけて排除しようとしたが、若者たちの熱は冷めることなく、

原宿に大きなカルチャーを誕生させ、その中心に山崎はいたのだった。ヤノはその山崎のいる側の世界へ走る列車に乗り込もうとしていた。

矢沢永吉の唄う 切符のいない、不思議な列車に乗り込み、夢のレールを走る瞬間にキタハラには立ち会おうとしているような感じがした。

ヤノはその話をすると笑顔で仲間の輪に戻り、満面の笑みをうかべている。

みんなヤノの肩を叩き、励ましている。

ヤノは自身を「貧乏でまだ芽が出てない」と嘆くがこの仲間がいれば、ヤノの努力が花ひらく日もそう遠くはないはずだ。

ヤノさん 一緒にサクセスしよう！ヤノの背中にそうメッセージを送り、キタハラはヤノの事務所を後にした。そしてもう一度、ヤノの話したピンクドラゴンに向かった。

営業時間は終わっているようで先ほどの人混みはなく、店の前をスタッフらしい50s ファッションに身を包んだ若者が掃除している。キタハラは店終いをするスタッフが皆笑いながら清掃をしているのを不思議な光景だと思いながら眺めた。きっと皆忙しい1日の終わりで疲れているはずだ、しかし誰一人、疲れた顔をするものはいないし、皆笑いながら店の前を掃き、またあるものは空き缶を拾ったり、ゴミの袋にせっせと周辺のごみを集めてている。山崎はもちろん億万長者だろう、しかし金なんてなくたって、自分のスタイルに誇りを持って生きていれば、人生は輝くかもしれない。その夢を山崎は若い奴らに与えているように見える。

その若者の笑顔は何か明るい未来を想像させた。

未来に夢があると人はこんな笑顔になれるんだ、キタハラはそう思った。ポートハウス、ピンクドラゴン そしてヤノさんのビタミンスタジオ、何か自分にもできる気が

する。キタハラは自分の価値観が急速に変化していくのを感じていた。その変化はキタハラの脳裏にある「ミュージアム」という言葉につながっていく。

ヤノさんは言っていたな、この建物の屋上にはプールがあるらしい。

そう思ってキタハラはピンクドラゴンの屋上を見上げる。

それも住人のためでなく龍を祀るものとして作ったプールだそうだ。

もちろん 龍が実際に住んでいるわけではない、しかし人々はその物語に惹かれるのだ。山崎の作ったのはファッションであってファッションでない、そう彼は物語を作り、それをカルチャーに昇華させようとしている。

まるでロックンロールそのものだ。キタハラの心の中でロックンロールが鳴り響く。

その五線譜の旋律がやがて、歌になり、物語になり、人々を魅了していくんだ。

キタハラは自分の物語は何か？と考えを巡らせた。この町では不良少年も、皆主人公になれる。ドクロの旗は大海原をいく羅針盤だし、ブラックジーンズと黒いシャツはまるで水夫のユニフォームだ。

キタハラはいつか自分のミュージアムを持った日には、オリジナルのウエアを作ろうと決めた。

## そうだ、ボクも独立しよう。

キタハラは初めて独立という言葉が胸の中でしっかり意識した。独立して自分のミュージアムを持つ、それがどんな大それた想像であっても構わない。

その夢をそっと口に出してみる

「ミュージアムを作る」そのたった一言だけ発声した夢だけで、キタハラが望むサクセスストーリーが誕生した。

それから数日して、キタハラがヤノの背中に投げかけた「サクセス」という文字が現実になることをキタハラがヤノにもたらすことになる。

いよいよゴールドラッシュの幕が開けようとしていた。